

年度 2007 学期 前期	曜日・校時 火 2	必修選択 選択	単位数 2
授業科目/(英語名)	人間と文化 (異文化理解の人類学) Humanity and Culture (Anthropology for Multi-Cultural Studies)		
対象年次 1・2年次	講義形態 講義	教室	
対象学生(クラス等) 全学部	科目分類 人文・社会科学科目		
担当教員(科目責任者) / Eメールアドレス/研究室/TEL/オフィスアワー 担当教員:増田 研 /Eメールアドレス:ken-m@nagasaki-u.ac.jp /研究室:環境科学部 410 /オフィスアワー:金曜日15:00~17:00。その他の時間についてはメールにてアポイントメントを取ること。			
担当教員	増田 研		
講義のねらい到達目標は以下の4点である (1)異文化理解におけるフィールドワークの重要性を理解すること。(2)文化人類学の主要な学術用語を用いて論述できるようになること。(3)個別文化の事例研究と比較研究による一般化過程について説明できるようにすること。(4)自文化中心主義から脱却し、文化相対主義的な異文化観を身につけること。 授業方法 ハンドアウトと映像資料を用いて講義を行う。毎回、講義に対するレスポンス・ペーパーを提出してもらい、授業への意欲、講義の理解度、学習の自主性、文章力を判断する材料とする。			
授業内容(概要) 文化人類学は、具体的事例を出発点として、文化現象全般の理解に至ろうとする演繹の科学である。 本講義では、担当教員(増田)のエチオピアにおけるフィールドワークを中心的な検討事例に据え、そこを出発点とする発見と理解と理論化の道筋をたどることとする。取り上げる事例は長崎大学から直線距離でおよそ9986km離れたアフリカの農耕牧畜民であるが、彼らは決して我々日本在住者と無関係な遠い存在ではない。 「われわれ」と「かれら」の間には空間的にも文化的にも著しい違いがあるが、にもかかわらず我々は同時代を生活している。そしてなにより、同じ人類として文化の違いを受け止め、共存しあうための認識の枠組みが必要であろう。本講義はそのための知的準備運動として、事例の紹介と検討の後に文化人類学的な脈絡における解釈を行い、異文化に接する態度と技を身につける。 1回目 文化人類学とフィールドワーク：人類学の方法論と舞台の紹介 2回目 日常生活の中の儀礼的实践：朝のコーヒーの場面から 3回目 霊的能力と政治的権力：口頭伝承に支えられた力 4回目 親族論：結婚していい関係と、してはいけない関係 5回目 インターミッション：小まとめ 6回目 生業経済と経営戦略：家畜と畑と市場から 7回目 労働とジェンダー：女性の視点から見る 8回目 年齢制度と儀礼：パナナの成人儀礼から 9回目 インターミッション：小まとめ 10回目 征服と世界経済：銃と象牙流通にみる外部世界とのつながり 11回目 「伝統」って何だ？：福音派キリスト教の到来 12回目 文化の伝達としての教育：子どもを学校に行かせるか、生かせないかの分かれ目 13回目 文化を取り替える：牧童が受刑者になって労働党の書記にまで行き着いた顛末 14回目 全体のまとめ 15回目 テスト			
キーワード	文化人類学		
教科書・教材・参考書	【参考書】 米山俊直(編)『現代人類学を学ぶ人のために』世界思想社、1995年 奥野克巳・花淵馨也(編)『文化人類学のレッスン：フィールドからの出発』学陽書房、2005年 山下晋司・船曳健夫(編)『文化人類学キーワード』有斐閣、1997年		
成績評価の方法・基準等	定期テスト60%、授業への積極的参加状況20%、レスポンス・ペーパーの記述20% ・定期テストは概念・用語といった知識に関する問題、および講義で取り上げた事例研究についての論述問題からなる。 ・出席率はレスポンス・ペーパーの提出によって算出する。 ・レスポンス・ペーパーの記述内容(量、質、文章)を上記点数に加えて総合点とする。		
受講要件(履修条件)			
本科目の位置づけ/学習・教育目標	人文・社会科学科目のなかにおいて、文化人類学の基礎を学ぶ科目である。隣接科目には社会学、民俗学、宗教学などがある。		
備考(準備学習等)			